

今

日はどこにも出かけないで、ずっと部屋に籠り、布団に寝転んで小説を読んだり、無心に天井を眺めながら外の物音を聞いたりしていた。注意してみると、本当にいろいろな音が耳に入ってくる。バイクのエンジン音、車がバックする時のピーピーという音、街を歩く人の笑い声、遠い飛行機の轟音、小鳥のさえずり。耳を澄ませ、それらの音を通して、浮かんでくる自分の記憶をたぐりよせていたら、だんだん不思議な気持ちになってくる。東京を離れて、さまざまな場所を思い起こし、どこに在るのか分からないような感覚だ。

信号が変わり、車が走り出す。その騒音に、なぜか砂浜を渡る波の音を思い出す。夏に親戚がみんな集まるサウスカロライナ州の海岸で、窓を開けっ放しにして寝ている時に聞こえてくる、あの波の音だ。急に思

い出して、潮風の匂いが蘇ってくるような気さえする。そしたら、今度はバイクがルルルンと轟き、その音で妹がアテネに一夏借りていたアパートを思い出す。実家のニューヨークと違ってアテネはバイクの交通量が多く、午後になると太陽がこれでもかと強く照り、暑すぎたので、今日みたいによくベッドに寝転んでバイクの音を聞いていたものだ。そうして見えないものの音に聞き入り、いろいろなことを思い出していたら、久しぶりに京都に住んでいた時の、ある夏の午後の記憶が浮かんできた。お能の『邯鄲』を観に行くことになっていて、能楽堂に向かっていた時だ。丸太町で信号が変わるのを待っていたら、脇にバスが止まり、バスのドアが開くあの独特な音がして、六十代後半くらいの白髪のおばあさんがゆっくり降りて来た。目が見えないらしく、白杖について

いたので、私は咳払いをして、自分がそこにいることを示した。すると、おばあさんが話しかけてきた。「すみませんが、河村能舞台はこちらですか」

「はい、道を渡ればすぐそこですよ」何年も日本のいろいろな土地に滞在してきて、日本人に道案内を乞われたのはその一回に限る。当たり前といえは当たり前だが、自分にとつては、特別な記憶である。今でも、能舞台を前にして、音のみで、あのおばあさんはどんな世界を思い描いていたのだろう、と考える。☺

道案内

マイケル エメリック
Michael Emmerich

翻訳家・日本文学研究者